暇と退屈の倫理学
國分功一郎

2023.11.17
輪読ゼミ　江藤遥奈

I　原理

■ブレーズ・パスカル (1623-1662)『パンセ』
・人間は部屋にじっとしていられないためにわざわざ不幸を招き、「気晴らし」を求める
＝熱中できさえすれば、＜欲望の対象＞を＜欲望の原因＞であると簡単に自分をだませる不幸を抱えている
・解決は神への信仰しかない
→気晴らしには苦しみと負荷が必要、気晴らしをもとめる人間＝苦しみを求める人間？
■フリードリヒ・ニーチェ (1844-1900)『悦ばしき知識』　パスカルと似たようなこと言ってる
・苦しみ＜退屈の苦しみ　ヨーロッパの青年の苦しみとファシズムの台頭
■シュトラウス
→近代文明の平和を盲信親世代、革命で終わると宣言する共産主義者どっちもうざい
→緊張のなかにある生が本来の生である！緊急事態においては打ち込むことができる！

■バートランド・ラッセル (1872-1970)『幸福論』1930　英米系分析哲学者
・満ち足りた人たちを襲う、贅沢病的「日常的な不幸」について考えた
・「退屈」＝事件を望む気持ちがくじかれたもの
・「事件」＝今日から昨日を区別してくれる興奮≠楽しいこと（楽しいことを積極的に求めるのは難しい）
・幸福であるとは、熱意をもって取り組める活動が得られること、幅広げよう
→これが何なのかどこにあるのかわからない、文化産業に搾取されているのが現代の問題では？
→課題が外側から与えられることを幸福とも読めてしまうが、逃避ではないか？
「不幸への憧れ」を生む、倫理的に問題を放置した解答では？

■ラース・スヴェンセン (1970-)
・退屈の原因はロマン主義（＝神死んだ。生の意味は個人が自らの手で獲得すべき。私らしい充実）である
・ありもしないロマン主義は捨てよう
→消極的やしないか？

II　歴史

2. 系譜学

・遊動生活時代の長さを鑑みると人類は１万年前の世界的気候変動によってやむを得ず定住を始めたと考えると考えられる。そこでは探索能力を発揮せずに住む余裕が生まれる。
■定住革命的人類史観　西田正規
・そうじやゴミを捨てる、トイレという習慣（遊動では必要ない）の現在まで至る困難は、定住革命が引き起こした困難の証拠である
＋人類史上の出来事というだけでなく、私たち定住民が人生の中で反復しなければいけない革命
・死者の体が近くにある→棲み分け→死への思いの強化→宗教
・社会的緊張が発生”水に流せない”→法体系、権威体系の発生
・そもそもの定住の原因の貯蔵→私有財産の発生

⇒退屈を回避する必要に迫られるように⇒「文明」の発生
⇒暇と退屈の問題は生活様式に、住むという様式に関係している

3. 経済史

■定義
・暇…何もすることのない、必要のない時間＜客観的な条件＞
・退屈…何かをしたいのにできないという感情や気分＜主観的な状態＞
→どんな関係？

■ソースティン・ヴェブレン (1857-1929)『有閑階級の理論』1899
・有閑階級…社会の上層部に位置し働く必要がなく、暇を人付き合いや遊びに費やしている階級
（近代に限った話ではなく、人類史において私有財産が発生した時からある階級）
かつて暇であることはステータスで、余裕のある階級にのみ許されたものだったが、歴史的には労働への負のイメージ減にともなってこの階級は縮小していく
・「製作者本能」＝有用性や効率性を高く評価し、不毛性浪費無能さをさげすむ本能
←これは理論的に破綻しており、ピューリタン的労働推奨文化贅沢忌避の趣味が出てしまっているただし次の指摘は重要である
・18，19Ｃの有閑階級であるブルジョワジーは成金でかつての貴族等がもっていた伝統「品位あふれる閑暇」をもっていないので、退屈に苦しみ始めた
→20C の大衆社会はさらに大衆が「余暇の権利」を持ち、同じく悩み始めた
→翻って、暇な人が必ずしも退屈するわけではない

■ポール・ラファルグ (1842-1911)『怠ける権利』
・19C 労働者の余暇の権利を求める運動→労働者賛美を抱え込む→アイデンティティである労働がいつのまにか神聖視されていく→狂気だ！やめよう！
⇒しかし、余暇を求めるだけでは資本の外部には出れない

■フォーディズム　（アメリカの自動車会社フォードが掲げた生産方式、理念）
・＜特徴＞ベルトコンベヤー＋高賃金＋余暇の承認
・すべて生産性のため。休暇も休むという形で働いていることになる (管理)
→余暇が労働に取り込まれた（余暇は資本の外部ではない）
⇒レジャー産業の登場…欲望そのものを作りだし提供する＜余暇の資本化＞

■ガルブレイス『ゆたかな社会』1958
・現代において「消費者主権」の原則は壊れてしまった　ex 携帯の買い替え
・「新しい階級」…仕事こそが生きがいと感じる人たち　に希望をみている
←ただし「仕事を充実させるべきだ」と主張することは強迫観念を呼び、新たな悲しみを生むだろう

■ポスト・フォーディズム（現在の社会）
フォーディズム終焉の理由
・フォーディズムは経済が右肩あがりでないと維持できない
・消費スタイルの変化
モデルチェンジによる「気晴らし」を与えられることに慣れ切った消費者→新たなモデルの仕方ない開発→機械投資できない！人間にやらせよ＋不安定なので労働者も一定数確保できない！→派遣増加
この謎構造を決死の努力で維持している。それは暇と退屈という根源問題を無視してきたからだ

4. 疎外論

消費社会において「疎外」という概念が大事なのでさらっておこう
■ジャン・ボードリヤール (1929-2007)
・浪費…必要を超えて物を受け取ること。贅沢の条件であり、豊かさの条件。どこかで満足できる
・消費…物などに付与された観念や意味を消費すること。物は記号になり、満足は得られないし終わらない。退屈を生む。　ex. 個性の煽り、そんなん完成しない
・現代の消費社会…物をへらし、記号を与え、浪費ではなく消費をさせようとする社会。ここでは労働も余暇も消費されていく。←質素の提唱ではない観点からの批判ができるかも
■『ファイト・クラブ』が描く消費社会の「疎外」（3 つの型＋破壊？ ）
■疎外＝人間が本来の姿を喪失した非人間的状態のこと　”これはなにか違う！”
1960－70 年に主に労働をめぐって流行したが、＜本来性＞をもとめる話（似非救済策）と切り離されず、危険なものとして避けられるように。＜本来性＞はあるべき姿を強制するもので、排除を引き起こすから。
⇒混ぜて捨てるのでは「疎外」という事態を扱えない。わけて考えるのが正統派である

■ジャン＝ジャック・ルソー (1712-1778) の＜自然状態 (no 政府 , 法)＞
・善良な自然人は「所有」がないので、いかなる縛りも受けず、好きに生きている
・自己愛（＝自分を守ろうとする気持ち、自己保存への衝動）を持つが、利己愛 (＝平等を前提とし、他人との比較にもとづいて自己を優位にしようとする感情) はもたないので邪悪になれない
・略奪は自然のできごとなので、まあ仕方ない
⇐※「社会状態」を客観視するための観念的な状態。自然に帰れというのは＜本来性＞を求める人の誤読である

比較：ホッブス　誤読した人：「自然にかえれ！」って言った人

■カール・マルクス (1818-1883)
・「疎外された労働」…資本主義下で、工場労働者がある作業を強制され、歯車となり、自らの素質を生かすことができない
・「欠乏と外的有用性によって決定される労働」が止み、「必然の国」があり、これを基礎、「労働日の短縮」を条件とすると「自由の王国」が実現される（暇において考えられている）
⇒本来性を求めない疎外論

比較：ヘーゲル　誤読した人：パッペンハイム、ハンナ・アレント

暇と退屈の倫理学
國分功一郎

2023.11.17
輪読ゼミ　江藤遥奈

Ⅲ　哲学

5. 哲学

退屈論の最高峰から考える

■マルティン・ハイデッガー(1889 - 1976)『形而上学の根本諸概念』

・退屈は分けて考えられる

①退屈の第 1 形式
…何かによって退屈させられること
ex.) 列車を待つための暇つぶし
物がいうことを聞かず、むなしく〈空虚放置〉され、
ぐずつく時間による〈引きとめ〉が発生する
(＝ものと自分の時間のギャップ)
→気晴らしで抑え込む

仕事の奴隷になっている「狂気」からくる。人間は自己喪失をしている

②退屈の第 2 形式
…何かに際して退屈させられること
ex.) 楽しかったけど退屈したパーティー
退屈と気晴らしと区別できない退屈
その状況そのものが気晴らしになっている状況
満たされようとする気持ちが投げやりな態度の中でもみ消され、自分自身が空虚となる
自分で停めた時間へと〈引きとめ〉られている
⇐ファイトクラブで見た「暇なし／退屈」の状況

「安定と正気」がある
人間の生の本質である

③退屈の第 3 形式
…なんとなく退屈だ
全てがいうことを聞かず､｢全くの広域｣に〈空虚放置〉される。
気晴らしは無力であり、退屈の声から逃れることはできない
→自分の可能性に強制的に〈引き止め〉がおこる
→逆に言えば、だからこそ可能性＝自由を「決断」することによりこれを発揮できる（結論）

第 1 をもたらす

深い

6. 人間学

ハイデッガーは人間だけが退屈できる、自由であると考える。結論が腑に落ちないのでもう少し深掘ると、動物について考えている。

■生物学者ユクスキュル「環世界 Umwelt」

…すべての生物が別々の時間と空間＝環世界を生きているという考え方
ex) マダニは 3 つのシグナルの連関のみの世界に生きている
ex) 人間は 1/18 秒を最小の単位として、それらの連なりを時間としている

→ハイデッガーはこれを批判し、人間には当てはまらない。人間には物そのものを認識でき、世界そのものと関われるので別に考えるべきだ。
ミツバチの例をあげて…
動物は「蜜」のようなものに〈とりさらわれて〉(衝動に駆り立てられて）おり､〈衝動の停止〉と〈衝動の解除〉の連鎖のみにおいて動く〈とらわれ〉の状態にある。人間はそうではない。

→人間にも環世界を認めるべきだ。ハイデッガーは無理をしている。
→それは人間も環世界の中で〈とらわれ〉ているのだろうか？それも違うかも
→環世界移動について考えると、人間は環世界をその他の動物に比べて相対的に高い環世界移動能力を持っている、という特徴がある、という説明ができる（他の動物、盲導犬なども可能)。
→ただ、これは人間が不安定な環世界しか持ちえないことを意味する→退屈を感じやすい
また､人間や盲導犬のことも考えると〈とりさらわれ〉は〈とらわれ〉の証拠ではない。つまり「環世界を生きる＝〈とらわれ〉の状態にある」は成立しない。動物も退屈しているかもしれない。

7. 倫理学

ハイデッガーは決断を推奨する。別の結論を出そう。
決断をするためには、何一つ言うことを聞かなくなる全体に引き渡されることが必要である。
→決断を欲すると、さまざまな物や人との関わりに目をつむるようにならないか？
　決断は狂気である。仕方なくではない、自ら (楽な) 奴隷になる事態を引き起こす可能性がでてくる。
＝退屈の第 1 形式と第 3 形式は同じ運動の一部と捉えるべきだ＝決断も自己喪失を招く
⇔第 2 形式が際立つ。これこそ人間が人間らしく生きる「正気」ではないか

人間と動物区別問題別視点
■アレクサンドル・コジェーブ (1902-1968)
・「歴史の終わり」…人間の歴史はある目的を持って進むこと、を前提にその目的が達成された状態
・ヘーゲルの弁証法、具体的にナポレオンのイエナの闘いにそれを見た
・これは、進歩を目指す「本来の人間」の消滅、「人間の終わり」を意味する
・その後の世界をアメリカ的生活様式（大量生産・消費）に発見する。満足を持続している。そこにいるのは「動物」である。人類はそのうち皆アメリカ人になる。
→のではなく日本人になる。日本人の「スノビズム」…実質ではなく形式化された価値を絶対とし、ハラキリや特攻も辞さない態度を発見する。ここでの日本人は人間である。

⇒コジェーブの「本来の人間」は退屈の第 3(1) 形式と対応している。これは本来的ではなく、第 2 形式の退屈を生きるのが人間である。時折第 3(1) 形式逃げ込むだけである。アメリカ人や日本人はどちらも第 2 形式の退屈の現れにすぎない。
⇒避けるべきは第 3(1) 形式から戻ってこれなくなること。テロリストへの羨望へと通じる。

第 2 形式の生き方について
人間は不安定な環世界を生きている
→安定させるためには、「習慣」(…周囲の環境を記号化、一連のシグナル化）を環境によって必死に考え獲得する必要がある。
＝人間は考えないですむ生活を目指している（フロイトの快原理に通ずる）
＝ドゥルーズがいうところの、環世界における新しい要素の「不法侵入」によって人間は考えることを要求される。習慣の変更を迫られる。

人間は第 2 形式の退屈をおおむね生きているので、つらい
→但しこの形式では、環世界の破壊をもたらす衝撃を受け止め、考える契機とすることができる（他形式では無理)。つまりその衝撃に〈とりさらわれ〉、新しい環世界の中にひたる〈動物になる〉状態がおこりうる。人間の環世界移動能力が根拠となる。これは希望である。
⇐おこりうるのであって、強制してはならない。大事なのは奴隷化回避

結論

（1）この本を読んで、退屈の新しい認識を得た読者は既に第一歩を踏み出している。こうしなければ、と煩う必要はない。それぞれの仕方で切り開くことになる。
←スピノザの「反省的認識」と同じく、分かるという過程を繰り返すことで人間は生きる術をかくとくする。情報の奴隷にならないことが大事

（2）× 消費、浪費による贅沢を取り戻す。食など、〈物を受け取る〉ことを楽しむこと。
(ハイカルチャーに限らず、日常的な楽しみにより深い享受の可能性がある)
←これは簡単ではない。訓練が必要である。
言い換えれば、第 2 形式のなかの気晴らしを享受し、人間であることを楽しむということ。
逆に消費社会とは、第 2 形式の構造を悪用し、悪循環を激化させる社会と言える。
cf. ■ウィリアム・モリス (1834-1896)

（3）人間は環世界を生きているが、その相対的に高い環世界移動能力によって退屈しやすい。
この人間らしい生活を外れた、つまり何かに〈とりさらわれ〉、〈動物になること〉で退屈を逃れられるのではないか。
→容易に習慣化できないものに〈とりさらわれ〉、思考する為には、結論（2）の楽しむ訓練が大事。どちらも物を受け取ることだから。（2）によって、（3）を待ち構えることができる。

残された課題…皆に暇を許す社会は訪れるか？

付録：傷と運命

なぜ人は退屈するのか？暇と退屈の存在論を考える

■サリエンシー
…興奮をもたらす新しく強い刺激
←原則的に世界の全てはサリエンシー
→現象の中に反復構造を発見し、予測モデルを形成することで慣れている
→その中で予測モデルの再限度の最も高いものとして経験され続けれいるのが自己

■小児科医　熊谷晋一郎
・急性疼痛…普段の痛み
・慢性疼痛…原因不明だが痛みが続く（神経系の中に痛みの記憶が残ってしまうため）
→そもそも全ての記憶は痛むもので、トラウマ的であるが、慣れによって感じていないだけでは
・脳には現在 3 つのネットワークがあると分かっている
(1) デフォルトモード・ネットワーク…興奮状態にない時作動。過去の知識の参照をつかさどる
(2) 前頭頭頂コントロール・ネットワーク…短期行動制御、無意識の誤差検出、調整
(3) サリエンス・ネットワーク…予測モデルからの大きな誤差に対応する
痛みの慢性化とは、サリエンシーに反応しやすくなり、物事を無意識に処理できず、覚醒度が低い安静時などに DMN が過剰に過去の記憶 (= 傷跡) を振り返り自己反省を繰り返している。
→急性疼痛は患者の覚醒度をあげるので、DMN がストップし、慢性疼痛をやわらげる
⇒強度なサリエンシーにより痛む記憶は、日常的に人間に沈殿していく。暇が訪れると、DMN の起動でその痛む記憶が内側から人を苦しめる。これが退屈ではないか。
⇒これは人間の「本性」ではなく「運命」ともいうべきものである。この態度は哲学界に新たな視点をもたらす

・反復構造の中には他者を媒介してはじめて予測モデルを形成できる（慣れる）ものがあるのでは、という熊谷の研究。他者が記憶の消化を手伝ってくれる。
⇒この「運命」が人間が他者を求める理由ではないか